辻褄合わせの集積所

吉田シロ

ケムリクサ二次創作SSです。最終回までのネタバレありのため、未読の人はご注意ください。

ケムリクサ文明でケムリクサを軍事運用する戦闘用複写体の青年わかばとお供のムシ。

彼が任務中に最果ての地で見つけた、『赤いケムリクサ』の中から現れた少女り。

世界から失われた何かを埋めようと、今日もその星に何かが転がり落ちてくる。

ケムリクサ軍事運用妄想と、冷奴と、自分勝手な救済のお話。

※こちらの話は、ｐｉｘｉｖにも投稿しています。

目次

1・赤のケムリクサ　1
2・りり　9

1. 赤のケムリクサ

空はいつも通りに陰気に薄暗い。わずかに明るい空の端は青紫で、それらを塗りつぶすように空の半分を黒いラインが走る。この惑星の環である。多重積層の環が厚すぎて、もしくは恒星が遠すぎて、この星の半分はいつでも薄暗い。

黄色い灯りが周囲を照らす。崩れ落ちる寸前といった風情の廃墟がゴロゴロと横たわる、いつもの風景。迂回し、乗り越え、飛び越えて、人影はその奥へ、奥へと歩いていく。その後を一生懸命に着いていくのは、白い円筒形の人工物だ。虫のように折りたたんだ四脚の足を器用に動かし、人影の後をついていく。ピピッと高い電子音が飛んだ。人影は、立ち止まり、相棒の到着を待った。彼の周囲には黄色く細長い光が2つ浮いており、周囲を照らし出している。シャカシャカと足を動かし、白い円筒形がせわしなく追いついた。

「ここかな。警戒しといて」

真っ黒なスーツに身を包んだ人影は、円筒形に答えると、崩れかけたビルを指し示した。躯体の半分は鉄骨がむき出しになった躯のようなビル。入り口をくぐると

当然ながら中は常闇で、人物の持つ黄色い光に照らし出されてようやくその姿を見せた。奇妙な作りであった。壁から生えている机や椅子、天井からぶら下がるノートの山、床に規則正しく空いた歪んだ穴。３ＤＣＧで部屋を作り、家具オブジェクトの配置を間違えた。もしくは誰かがそのように配置した。そのような印象を受ける。作り物めいているのだ。

人影は、その奇妙な光景を意に介さず、どんどんと奥へ進む。そのフロア全部を覗いて、上にも下にも行けないのを確かめると、今度は床に空いた穴を覗き込んだ。中からはかすかに風の音。

腰のポーチから何かを取り出すと、それは人影の手の中で丸く弾け、そして黄色く光りだした。穴の中に投げ込まれる。黄色い光は、闇の中にまっすぐ落ちていって次の瞬間弾け、全てが黄色になるほどの光で穴の中を満たした。瓦礫で埋まった空間。天井や壁が剥がれ落ち、何もかも押しつぶしている。そんな中で、黄色い光に呼応するように、赤い光が灯った。真っ赤な光だった。

「見つけた、あれだ」「ピピッ」

人影の声に、白い円筒形ロボットの電子音が被さる。警告を含んだ圧縮電子言語

に人影が反応する前に、彼の身体は宙に舞った。紫の光が黒いスーツを貫く。細く長い、刃物状の何か。どこに潜んでいたのか、闇から湧いた大量のそれらが、人影を引き裂き、地に叩きつけて、宙へ放り投げた。何度か空中をバウンドして、落ちてきたそれは、もうすでに人の形をしておらず、主人のもとへ駆けつけようとした白いロボットは、やはり数十体の細長い何かに襲われ、地に転がっていた。上部が切り落とされて、そこから泡のようなものが立ち上り、足を何度か動かして動かなくなる。

　襲撃者達は空中に静止した。1m はあろうかという長く細い身体は、魚に酷似している。黒い素体に紫色の光が走り、薄い明滅を繰り返していた。隊列を組んだ数十匹の魚達の間から、ゆらり、と煙が立ち上った。数匹が煙を出して消え、その煙はくるりと綺麗な円を描く。紫の縁の上にもう一本、青い円が現れる。その穴から飛び出してきたのは巨大な骨。ツギハギに組み合わされた出鱈目な骨の造形物は、勢いよく穴から身体を引き抜くと、身を起こした。骨の巨人は天井に頭部がめり込むが、意に介さず、勢いよく地面を踏み鳴らした。物言わぬ人影と白いロボットがくしゃりと踏み潰されて、あっという間に消える。大量に葉が飛び散った。それは

煙のように周囲を包み込んで、一瞬で消えた。骨の巨人がまた歩き出し、地面が揺れた。緑がかった黄色い光が、まるで先程の魚達の襲撃のように背後から巨人の背に突き刺さった。

「ｻﾞｻｯ」

数本もの電撃が空気を切り裂いて巨人を撃つ。魚達が巨人を守ろうと青く展開したところで、緑色の光が、その群れを薙ぎ払った。部屋中にイオン臭が広がる。先程切り裂かれて息絶えたはずの黒い人影が闇から躍り出し、空中で黄緑色の光をさらに展開する。宙に浮かんだ光が連動し、まるで陣のようにぐるりと輪を描いて巨人の上にまっすぐ落ちる。

骨の巨人はその光から身を守ろうとするように両手を上げ、その手からは青い光とともにガラスのような厚みが実体化し、その盾は瞬時に広がった。

光輪が盾に触れるよりも一瞬早く、魚達を薙ぎ払った緑の光が盾を撃ち抜いた。パキィイイン、とガラスのように砕け散る音が響き、巨人はドッと膝をつく。頭部が、消滅していた。その身体はもう一度起き上がろうともがいて、もう一度緑の光線に撃ち抜かれた。

ザァアアアッと波のような音がして、巨人の身体が無数の白い葉になって消えていく。

「ピッ」

「うん、おつかれ」

黒い人影は、骨の巨人が消えるまで動かなかったが、背後からの電子音に振り向いた。白い円筒形が展開し、細長い円筒形の先端から煙をくゆらせながら、自走式砲台とでも形状しがたき物が、カシャカシャと近づいてくる。先端から全身にうっすらと緑の光の線が走っていた。それは身体中から飛び出した突起を収納しつつ、もとのつるりとした円筒形に形を変えていく。

「囮は駄目だな。コントロールしながらだと、紫が上手く動かせない」

「ピピピッ」

「そりゃ向こうが上手く引っかかってくれたけど」

「ピピッ」

「それは今後の課題……ん。あれだ。さっき見つけた『オブジェクト』」

話しながら、床の穴まで来た人影とロボットは、暗い地の底を覗き込んだ。赤い

光が見えた。赤い光はゆっくりと上に上がってくる。それは、植物のつるのようだった。のたうち、うねりながら、まっすぐ上へ。その先端は膨れ上がり、先程の巨人とは別の骨のように、重なり合ったいくつものパーツで構成されていた。

「赤いケムリクサ？　初めて見る色だ……」

「ピッ」

先端の『つぼみ』は、もはや穴を越えてフロアの天井まで届き、そこから頭を垂れるように少し下へと降りてくる。ちょうど、人影とロボットの前に。その大きさは、人をも飲み込めるようなサイズだ。『葉』が緩やかに開いていき、それは、花を咲かせるように大きく拡がった。人影とロボットが警戒して下がったちょうどその前に、花の中から何かがこぼれ、落ちてくる。

とっさに手を伸ばした、その上に。黒髪が、小さな手が、白いワンピースが落ちる。

「……女の子？」

腕の中の少女を抱え、薄茶色の髪をした青年は、表情の薄いその顔に困惑を貼り付けて呟いた。

「これは……想定外の『オブジェクト』だな……」

2. りり

今日び、志願兵など殆ど来るものでもなく、だが軍備を０にするという事が出来ようはずもなく、潜在的敵性存在と資源開発も続く中で、一つの解決となったのが『戦闘用複写体』であった。

国民の完全な個人データの提出を義務付け、任務に応じて調整した半ケムリクサの兵士としてプリントするのである。

例え複写体が戦死しても、リアルタイムで上書きされるリアルデータはバックアップされ、都度彼ら彼女らは経験を積んだ兵士として連続的な意識を持った状態で再プリントされる。これにより人的消耗は解決し、軍部は常に一定の兵力を保てる。

故に倫理的観点から起こった反対運動はどれも複写体配備計画に全く傷を残さなかったし、兵士達にも何の感慨も与えなかった。彼らは自身が確かにオリジナルとは違う別の存在だと認識しており、兵士として調整、最適化されている事も知っていた。そこには故郷を守る誇りがあり、兵士として産み出された事に嫌悪はなかっ

たのだ。

彼の場合も概ね同じような認識で、だからこの話をした時に少女の顔が曇ったのが理解できなかった。赤いケムリクサから生まれた彼女のは『りり』と名乗った。

「ぼくらの事はあまり気にしないで。それよりも君だよ。この赤いケムリクサは何なのかとか、どういった事件があったのかとか、全然覚えてない？」

「そんな事言われても、全然覚えてない……」

「君が出現した時点で、多分どこかで何かが大きく失われるような何かがあったはずなんだよね」

「何かって？」

「人命かもしれないし、建物や土地かもしれないし、物質ではなく事象かもしれない」

「それって、何もわからないってことじゃない……？」

「そうとも言うかな」

少女はうす暗い空の下で、呆れたように青年を見上げた。青年は薄く蛍光する緑色の葉を加え、大きく吸い込んでいた。煙草のような嗜好品だろうか、煙さを感じ

て、少女はパタパタと手を振る。一度臭いと言ってみたのだが、「嗜好品じゃなくて必要なものなんだよ」と取り合ってもらえなかった。

そういえば、お父さんも煙草を吸っていた。思い出して、少女は下を向いた。父も母ももう居ない。自分が何故ここにいるのかもわからない。手の中にあるのは小さな赤い葉で、最初はもっと大きかったと言われても、まずこの赤い植物がわからない。ケムリクサと言うらしいが、初めて見た。

「ケムリクサは便利なんだけど、色々危ないんだ。それはもう枯れているから大丈夫だと思うけど、気をつけて」

何を気をつけろというのか。うっすらと赤く光る葉は、萎れているように見えた。

「危ないなら……わかばが持っていてくれたらいいよ」

「それはりりと関係あるものだから、君が持っていたほうがいいんだ。『オブジェクト』は複数の要素で構成されている場合、引き離さない方がいい。りりと赤いケムリクサのセットで出現したから、君たちは同じ事象なんだ」

わかばの言うことはよくわからない。今、立っているここが地球とは別の惑星で、わかばが宇宙人というのだって信じられない。傍らを細長い筒状のロボットみ

たいなものが歩いていて、それは時々ピピッと音を立てて、前面に嵌ったモニターに文字を表示するのだが、それだってカタカナだ。宇宙人は日本語をしゃべるのだろうか。わかばはりりよりも大人だが、20代に見える。近所の大学生のお兄さんといったところか。任務中の軍人だという。映画に出てくる軍人の人は武器を持っていてムキムキで強そうだが、わかばは何も持っていないし、ムキムキで強そうでもない。どちらかといえば細いし、頼りにもならなさそうである。

ピピッ。またロボットが何かを言っている。リリ　ツカレタ？　りりに話しかけてくるその様子は可愛らしくて、りりは少し笑顔になった。

「まだ大丈夫。でも、すごく、歩きにくいね」

廃墟が続く。薄曇りの空の下で、延々と廃墟が続く。道路は陥没し、建物は崩れ、看板はことごとく落ち、都市丸ごとの死骸が続く。地割れを避けて歩くだけでも大変だ。

「もう少しかかるから、りりはヌシイチの上に乗っていくといいよ」

「この子の上？」

細長いロボットの頭頂部に座れというのか。滑り落ちそうだし、座り心地もよく

なさそうだ。りりが、ヌシイチと呼ばれたロボットをじっと見つめると、ヌシイチは急に細長い身体を前傾させた。身体の下から新しい脚が出現し、上になった部分には椅子のようなパーツまで競り上がってきた。脚の生えた砲台の上に、座席がついたような形といえばいいだろうか。

　モニターにはスワッテと出ている。座っていいのだろうか。少し躊躇っていると、わかばが後ろからひょいっとりりの身体を持ち上げて、座席の上に座らせてくれた。

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして。寝ててもいいよ」

　薄暗い空。両手には、枯れかけた赤いケムリクサ。どこまでも続く廃墟。奇妙な青年とロボ。まるで現実味のない風景。どこに向かっていて、どこから来たのかもわからなくて、自分がこの先どうなるのかもわからない。だけど、奇妙な事に、不安はあまりなかった。驚きはある。怖さもある。だけど、家にはもう誰も居なくて、りりには帰るところがない。どうなってもいいや、という虚無にも似た自棄で、りりは前を歩くわかばの背を見た。黒い服の上に走る緑色の光るラインが、やけに

眩しかった。

辻褄合わせの集積所

著者　吉田シロ

発行日　2019 年 12 月 20 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
https://syosetu.org/novel/189153/

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。